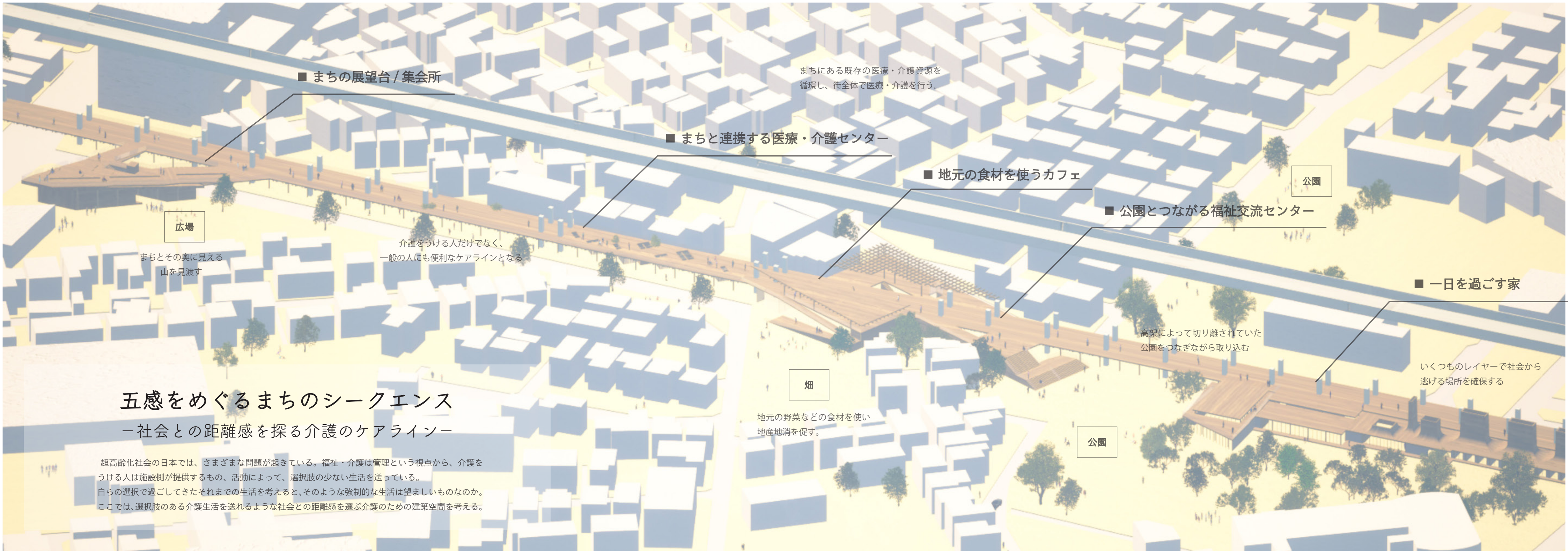


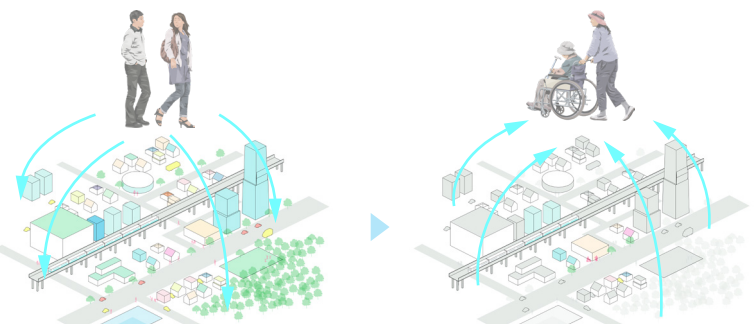


五感をめぐるまちのシーケンス ー社会との距離感を探る介護のケアラインー

超高齢化社会の日本では、さまざまな問題が起きている。福祉・介護は管理という視点から、介護を受ける人は施設側が提供するもの、活動によって、選択肢の少ない生活を送っている。自らの選択で過ごしてきたそれまでの生活を考えると、そのような強制的な生活は望ましいものなのか。ここでは、選択肢のある介護生活を送れるような社会との距離感を選ぶ介護のための建築空間を考える。

■ 切り離され、管理される介護

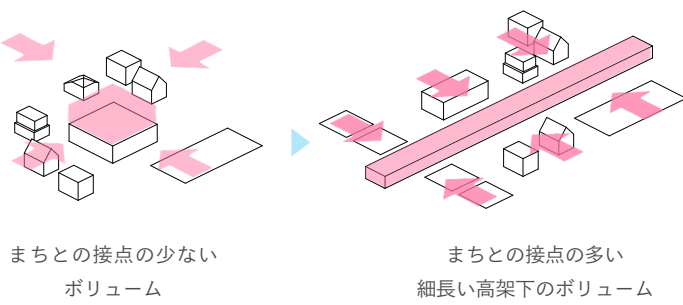
福祉・介護は管理という視点から、被介護者は施設側が活動を提供することによる受動的、場合によっては強制的な生活が送られている。しかし、それまでの生活の延長線上にある日常には、自らが選ぶことのできる、社会との関わり方の選択肢が必要なのではないか、と考える。



自分から行動を選択できる生活

受け入れることによる生活

■ まちとの接点を選びとる介護生活のあり方



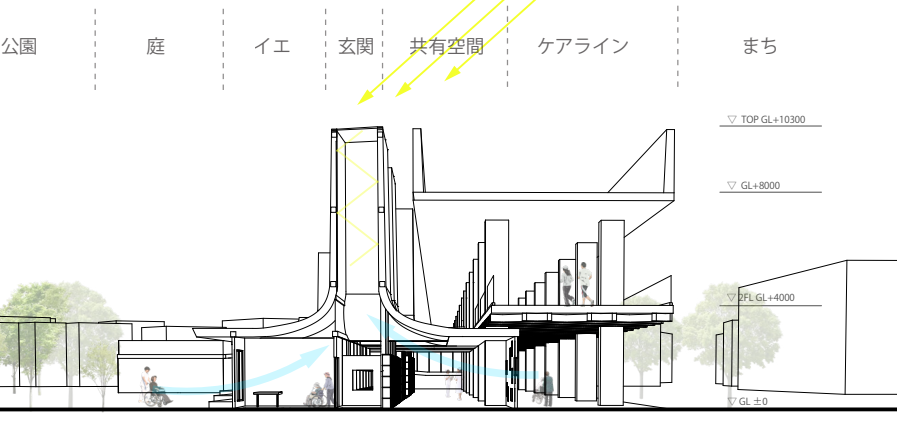
介護において、施設が行う活動を受け入れるという生活の現状に対して、ここでは、自分のやりたいことの選択肢が増えるような介護福祉のあり方を提案する。ここでは、細長く、まちの中心とも言える高架下を敷地とし、まち、社会と接する面積を増やすことで、介護を受ける側の人の活動の選択肢を増やす。

■ 移り変わる五感の風景

敷地周辺の特徴をケアラインに引き込むように計画する。まちの食堂の匂いや子どもたちが遊ぶ公園の音の風景が変わっていく。まちの特徴によって移り変わっていくシーケンスを五感で感じ取れるようなケアラインとなる。

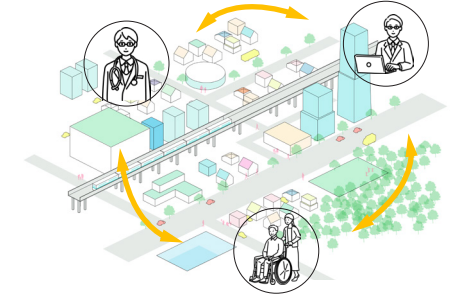


■ レイヤーで隔てるまちとの境界



生活の中での選択肢にはまわりと関わらないという選択肢も含まれる。ここでは、いくつかのレイヤーを重ねることによって、介護を受ける人が逃げうる空間をつくり出す。

■ まちと連携する医療・介護

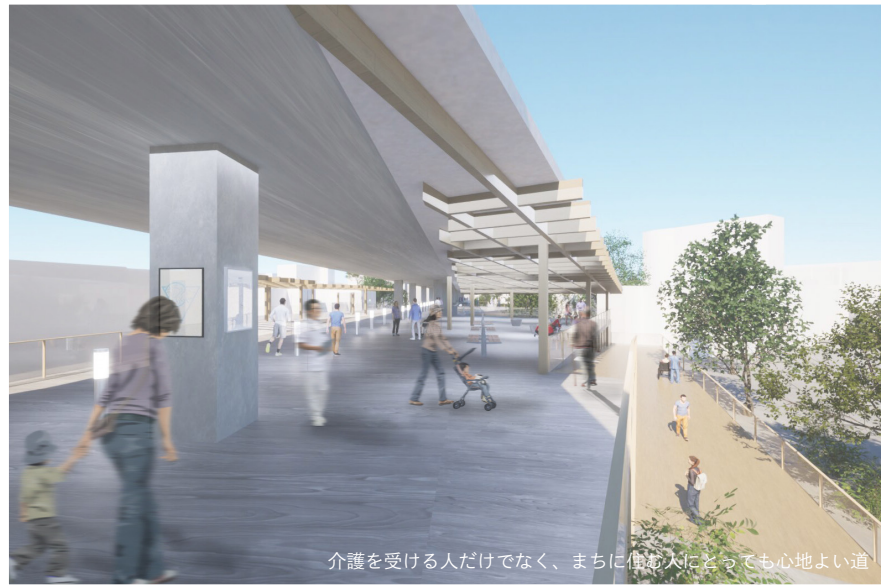


まちにすでにある医療、介護の施設と連携することによって、まち全体で医療・介護を支える、「地域包括ケアシステム」を実現することができる。細長いボリュームのなかにそれらを連携するためのステーションをつつらえ、医療・介護の資源を循環する。

■ 五感をめぐるまちのシーケンス



まちを見渡す展望台



介護を受ける人だけでなく、まちに慣れ込んでも心地よい道



まちでとれた食材を使ったカフェ



公園と一体になり子どもたちの遊ぶ声が聞こえる



風と光が入り込み、交流したり、1人になれるさまざまな空間が緩やかに区切られる

■ まちの中心となる福祉のライン

